HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	東チベットの宗教空間 : 中国共産党の宗教政策と社会変容［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	川田, 進
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	乙第7008号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65751
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Susumu_Kawata_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　氏名：　川田進

主査　教　授　櫻井　義秀
審査委員　副査　准教授　今井　順
副査　教　授　吉開　将人

学位論文題名
東チベットの宗教空間――中国共産党の宗教政策と社会変容

本論文は、チベット高原東部に位置する中国四川省甘孜藏族自治州にある仏教寺院や仏学院、修行地において興隆するチベット仏教の近現代史と現況を、中国の宗教政策とチベット（特にカム）の地域研究から明らかにするものである。

従来、チベット仏教の現代的研究は、ダライ・ラマ 14 世やチベット亡命政府が発信する情報と、中国政府が公認するパンチェン・ラマ 11 世の愛国活仏的な言説や政府による「ダライ集団」批判などとの間でバランスを取りながら、主としてラサが位置するチベット自治区や青海省のアムドでの調査に基づくものが多かった。本研究は、ほぼ日本人を含めて外国人の研究者が容易に立ち入り、調査ができなかった地域においてチベット仏教の現況を明らかにしたものである。

著者の川田氏は元々毛沢東研究から中国研究に入り、1991 年から毎年東チベットを短期間訪問し、特に 2001 年以降は、甘孜藏族自治州に絞ってチベット仏教の動態と中国共産党の宗教政策との関係を調査してきた。

本研究で特筆すべきは調査手法にある。チベット仏教への統制が厳しく、外国人研究者に自由な調査が許可されない状況において、川田氏は当局や地元研究者などの支援をあえて受けず、自身の漢語を用いた聞き取り調査と参与観察により、同地で資料を収集した。このやり方は、宗教統制がかなり緩和された胡錦濤の時代（2002～12）には有効だったが、習近平政権下（2013～）では困難になったとされる。また、文献調査は、党・政府の内部資料、宗教組織の内部（政府非公認）資料、漢人信徒組織がインターネット上に公表した各種資料、政府公告等も参照している。

本論文の成果を一言で述べるなら、地道な調査手法によって調査困難な地域におけるチベット仏教の現況を、政府の宗教政策との関連において具体的な事例ごとに明らかにしたことである。

具体的な研究成果として、第 1 に、デルゲ印経院が文革時に保護されたことに関して、パンチェン・ラマ 10 世の政治的利用にかかる統一戦線活動から論証したこと。第 2 に、ラルン五明仏学院の興隆と公安当局による粛正･破壊活動を、仏学院指導者への複数回のインタビューと現地調査から詳細に記述したこと。第 3 に、ヤチェン修行地の形成をアチュウ・ラマからアソン・リンポチェへのカリスマの継承という観点から、修行地の活写と共に考察したこと。第 4 に、仏学院や修行地に集まる漢人信徒へのインタビューから、彼･彼女たちのライフストーリーや修行動機を明らかにしたこと。第 5 に、仏学院の社会活動の分析から、指導者のケンポ・ソダジが社会貢献活動を通して中国共産党に対して仏学院の存在意義を柔軟にアピールしていることを分析したこと。第 6 に、2008 年の東チベットの騒乱（僧侶の焼身自殺抗議行動を含む）の背景を、政府の抑圧的宗教政策と指導者を欠いた寺院における若年僧侶の不安から事件誌として分析したことなどが、挙げられる。

これらの成果を東チベットの地誌としてわかりやすく記述していることも本論文の成果である。

ただし、本論文で示された各章ごとの調査上の知見は有益であるものの、①地域研究の立場からは、個別事例の分析によって結局いかなる地域像が全体として描き出されるのか、やや鮮明さを欠くこと、②中国研究の立場からすると、東チベットの動向は北京当局とインドのダライ・ラマ亡命政府との関係性の変化の中で歴史的に評価されるべきものであるが、そうした巨視的分析が弱いこと、③中国共産党の宗教政策はわかるものの、当地における社会変容の分析が仏学院や修行地の状況を通してしか見えてこないので、社会学的観点からはもの足りなく感じること、④社会変容の記述とも関連するが、調査手法上の制約からチベットの僧侶･尼僧への間接的なインタビューが多く、漢人信徒における中国社会に対する視線はわかるが、チベット人の視線については十分に記述しきれていない部分があるのではないか、といった論点が出された。もっとも、これらの質問への答えは一書でなしうることではなく、著者による 2 作目、3 作目への期待を込めての課題提示であり、著者による異なる分野の研究チームによる調査や、国際的な共同研究において補完することが可能ではないかという今後の見通しを聞いている。

本申請論文が、既に日本学術振興会の出版助成を得て刊行され、専門学会誌においても書評が掲載される水準のものであること、口述試験において著者の学識が十分であると確認できたことから、本審査委員会は、本申請論文が博士(文学)の学位を授与するのにふさわしいという結論に達した。